

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 20 日現在

機関番号：64401

研究種目：基盤研究(A)

研究期間：2008～2013

課題番号：20251011

研究課題名(和文)大規模災害被災地における環境変化と脆弱性克服に関する研究

研究課題名(英文) Catastrophic Natural Disasters: Studies of Environmental and Social Change and Activities to Reduce Future Vulnerabilities

研究代表者

林 勲男 (Hayashi, Isao)

国立民族学博物館・文化資源研究センター・准教授

研究者番号：80270495

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 31,600,000円、(間接経費) 9,480,000円

研究成果の概要(和文)：大規模災害被災地への人道支援や復興支援は、災害規模が大きくなるほど、地域を越え、国を越えたものとなる。そうした支援が被災地の従来の社会関係資本を正しく評価し、それを復旧・復興に活用し、さらにはその機能と価値を高めることによって、将来の更なる災害に対する脆弱性を克服することに繋がる。しかし、地域や国を越えての異なる文化や社会構造の理解は容易ではなく、多分野の専門家や住民との協働が求められる。それは、開発途上国の被災地への支援だけでなく、先進国で発生した災害の被災地支援についても同様であることが、2011年3月発生の東日本大震災で示された。平穏時から、対話と協働に基づく活動と研究が重要である。

研究成果の概要(英文)：As the scale of natural disaster becomes larger, the humanitarian assistance and reconstruction support tend to be extended crossing over the borders of regions and countries. Those who extend their support to another culture with different social structure need to correctly evaluate the social capitals and values, and then make use of them in the reconstruction process. The understanding of local knowledge and value will contribute to reduce vulnerability and to enhance resilience of a society.

To achieve success in building a less vulnerable and more resilient society, collaboration of many sectors; academics from various disciplines, residents, governments, NGO/NPO etc. are indispensable not only in developing countries but also developed countries. Lessons learnt through our experiences in the Great East Japan Earthquake in 2011 should also be transferred in the future activities of overseas assistance.

研究分野：人文学A

科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学

キーワード：文化人類学 民族誌 環境対応 脆弱性 自然災害

### 1. 研究開始当初の背景

特定地域社会の脆弱性評価とその対策については、地震や集中豪雨などの自然現象、災害に至る自然環境条件、そして住宅・交通通信網・都市構造などの物理的環境の評価がなされる程度で、文化や社会構造が構築されてきた歴史への視点や、脆弱性が社会的・文化的に構成されるものとの認識を多くの研究は欠いていた。

(1)日本においては、「災害弱者」概念の普及とその実態への研究者コミュニティや災害対応にあたる実務者による関心が高まる一方で、社会の底辺もしくは周縁に置かれたグループの脆弱性がローカルおよびグローバルな社会の関係性の結果との認識に基づいた対応策の検討には至っていない。

(2)被災地の脆弱性をもつ固有性への理解が不十分なため、効果的な防災・減災策を復興計画に組み込むことに失敗しているケースが少なくない。

(3)復旧・復興では社会秩序の回復、経済や行政機能の再建、インフラ回復などが優先され、次の災害への対応策が十分に図られないばかりか、復興策自体が社会格差を生じさせ、その結果として、特定の人びとの災害に対する脆弱性を高めてしまう事態も起きている。

### 2. 研究の目的

大規模自然災害による自然及び社会環境の変化を、被災地での現地調査に基づき、その地域社会が被災をいかに受け止め、その社会の持つ脆弱性をどう評価し、その克服に向けてどのような取り組みをしているのかの実態を明らかとする。

### 3. 研究の方法

文化・社会人類学者が、それぞれの調査地において人びとの実生活の中での視座を捉え、災害の影響と、災害に対する脆弱性ならびに防災・減災への取り組みに焦点を当てたエスノグラフィー調査を実施した。防災学者は、人類学者と協力して現地調査を実施することで、復興計画の策定作業と実施状況、さらには災害脆弱性克服のために、行政・住民・外部からの支援組織等が実施する活動について、時間の経過に沿って明らかとした。

具体的には、すでに10年が経過している1998年に発生したパプアニューギニアのアイタペ津波被災地コミュニティの移転と民族集団の関係について、そして2001年発生したインド西部地震被災地における地場産業の再建とコミュニティの移転について調査した。また、2004年12月発生したインド洋地震津波の被災地(インドネシアのスマトラ島、インド南東部、スリランカ南部、タイ沿岸部)の復興および防災対策に関する調査では、文化・社会人類学者と工学をバックグラウンドとする防災学者が協力し調査をおこない、エスノグラフィーの方法論の有効性についての検証もおこなった。

2011年3月11日に東日本大震災が発生したことで、本務の関係上、国内の被災地での調査と支援活動に多くの時間を割かなければならないメンバーもあり、彼らは、自然災害への対応力が高いと評価される日本の状況と、開発途上国の状況を比較研究の視点から、類似性と相違性の背景についても調査した。

### 4. 研究成果

(1)津波により甚大な被害を受けた漁村の持つ災害からの自己快癒力(レジリエンシー)は、親族や姻族それに近隣関係といった社会関係資本のネットワークや、それらと密接に結びついて精神世界に深く埋め込まれている信仰によって支えられていることを確認した。

(2)しかし開発途上国の被災地の多くでは、緊急人道支援や、その後のさまざまな分野における復興支援の在り方次第で、そうした相互扶助的なネットワーク機能が阻害されるばかりか、社会関係そのものを断絶させてしまう事態も発生する。すなわち、自然災害の影響は、ハザードによって直接もたらされるものだけでなく、仕事や住宅などの支援が不平等・不適切に行われることで発生する場合もあり、結果的に被災社会の一部では、次の災害に対する脆弱性がより高められてしまうことも明らかとなった。

(3)支援する側の当該社会とその文化への理解が重要となるわけだが、そのための被災地の文化・社会に精通した研究者の協力が、常に確保できるわけではない。対策としては、人選に際して有効な評価基準を過去の事例から作成すること、また、支援活動をモニタリングする人材を確保し、支援策とその効果の評価だけでなく、支援の影響を多方面に渡って、しかも可能ならば長期的に調査する仕組みが必要となる。

(4)災害を経験した人びとにとっては、その経験に裏打ちされた「科学」への信頼度は急激に増し、次の災害に備えて、より安全な場所への移住や建物の耐震補強などの選択行動を起こす。しかしながら、具体的な対策を講じようとする際に、情報や資金の獲得の困難さに加えて、踏まなければならない煩雑な手続や社会関係によって、当初の計画の達成には至らずに妥協点を見つける結果が往々にして生じる。それは、2011年3月に発生した東日本大震災で被災した東北太平洋沿岸のコミュニティにおいても同じであり、過去に多くの津波災害を経験した三陸海岸では繰り返されてきたことも明らかとなった。

(5)災害研究においてもエスノグラフィー調査の有効性は、防災研究者のみならず行政職員やNPO・NGOといった組織のメンバーにも次第に認識されては来ているものの、実際には短時間に情報を当事者からインタビューを用いて直接的に採取して終わるものが少なくない。文化・社会人類学での参与観察と

いう長期にわたるフィールドワークは、災害研究とりわけ被災地が復興過程にあり、被災者の生活再建や地域社会の再生が急務の状況下では限界はあるものの、方法論上の検討は今後も発展させる必要がある。

(6)本プロジェクトは、専門とする調査地を持つ文化・社会人類学者と理工学をバックグラウンドに持つ防災学者との共同によるものであり、上記のような課題の認識は、その研究成果の一つとして今後は具体的な地域での長期の共同調査という形で検討を進めるべきものとする。すでに、東日本大震災の東北被災地では、人類学も含めた複数の分野の専門家や住民も参加しての災害検証や地域の復興のための活動も始まっている。その成果は、今後の海外での被災地支援や防災対策にも生かされると考える。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計90件)

河本尋子、重川希志依、田中聡、2013、「ヒアリング調査による災害応援・受援業務に関する考察：東日本大震災の事例」『地域安全学会論文集』20(4)：1-9、査読有

Maki, Norio, 2013, “Disaster Response to the East Japan Earthquake Disaster in 2011: National Coordination” *Earthquake Spectra* 29(S1): 369-385、査読有

山田忠・松本康夫・柄谷友香、2013、「水害常襲地域における住民の水害に関する知識と水防組織の組織構成および活動の特徴と関連性」『地域安全学会論文集』18: 461-471、査読有

林勲男、2012、「仮のすまいとコミュニティ：その連続と断絶」『建築雑誌』1633: 4-5、査読無

Hayashi, Isao, 2012, “Folk Performing Art in the Aftermath of the Great East Japan Earthquake” *Asian Anthropology* 11: 75-87、査読有

林勲男、2012、「民俗芸能の再生：鹿踊りへの支援から」『HUMAN』3: 83-90、査読無

高桑史子、2012、「浜の仏陀像とカーリー女神像：インド洋津波後のスリランカ南岸村の変化」『人文学報 社会人類学分野5』453: 1-18、査読無

田中聡・重川希志依・柄谷友香、2012、「東日本大震災における緊急消防援助隊の 에스ノグラフィー調査」『地域安全学会東日本大震災特別論文集』1: 43-45、査読有

Kharul Huda, Naohiko Yamamoto, Norio Maki, 2012, “On-site permanent housing supply in the reconstruction stage after 2004 indian ocean tsunami The case of un-habitat in Banda Aceh municipality in indonesia” 『日本建築学会計画系論文集』675: 959-968、査読有

Yamada, Tadashi and Karatani, Yuka, 2012, “Effects of Local Community Activities on Views Concerning Flood Responses and Countermeasures” *Journal of Hydrosience and Hydraulic Engineering*, 30(1): 47-61、査読有

山田忠・松本康夫・柄谷友香、2012、「水害常襲地域における転入者の水害に関する知識と家屋対策に関する分析」『土木学会論文集 F6(安全問題)』68(2): CD-ROM、査読有

齋藤千恵、2012、「インド洋津波被災地アチェにおける女性の経済活動とイスラム教」『鈴鹿国際大学紀要』19: 49-64、査読有

鈴木佑記、2012、「漂海民再考：海民研究へ向けた覚書」『南方文化』39: 117-134、査読有

林勲男、2011、「災害のフィールドワーク」日本文化人類学会編『フィールドワークーズ・ハンドブック』世界思想社、pp. 244-262、査読無

市野澤潤平・木村周平・清水展・林勲男 2011、「東日本大震災によせて」『文化人類学』76(1): 89-93、査読有

Sugimoto, Seiko, Antonysamy Sagayaraj, Sugimoto, Yoshio 2011, “Sociocultural Frame, Religious Networks, Miracles: Experiences from Tsunami Disaster Management in South India” Pradyumna P. Karan and Shanwugam P. Subbiah (eds.), *The Indian Ocean Tsunami, The Global Response to a Natural Disaster*, The University Press of Kentucky/Cambridge University Press, India, 223-235、査読無

真木梨華子・山本直彦、2011、「インド洋大津波後のインドネシアにおける住宅再建 その3 バンダアチェ市内の再定住地パンテリーク居住者の履歴および恒久住宅の初期増改築」『日本建築学会大会学術講演梗概集』F-1分冊、841-842、査読無

鈴木佑記、2011、「創られた災害：洪水神話から出来事としての津波へ」『地域研究』11(2): 139-160、査読有

林勲男、2010、「総論：開発途上国における自然災害と復興支援：2004年インド洋地震津波被災地から」林勲男編『自然災害と復興支援』明石書店、pp. 13-32、査読無

Maki, Norio, Yamamoto, Naohiko, Khairul Huda.2010“Long term recovery from the 2004 Indian Ocean Tsunami Housing Recovery in Banda Aceh” *Proceedings of 14 ECEE 1462*: CD-ROM、査読有

①牧紀男、山本直彦、2010「バンダアチェの住宅再建：現地再建と再定住地」林勲男編『自然災害と復興支援』明石書店、pp. 331-360、査読無

②Kazuhiro Hirao, Naohiko Yamamoto, 2010 “Temporary Housing” *The Publication Committee of the “Introduction Volume to Cultural Heritage Disaster Mitigation*

Studies (ed.), Introductory Volume to Cultural Heritage Disaster Mitigation Studies: 153-158、査読有

②③ 栖谷友香・高島正典、2010、「水害後の訴訟回避に向けた地域リーダーの対応と役割：行政と住民をつなぐコミュニケーション・ルールの検討」『地域安全学会論文集』13：471-479、査読有

②④ 鈴木佑記、2010、「『悪い家屋』に住む：タイ、スリン諸島モーケン村落の動態」林勲男編『自然災害と復興支援』明石書店、pp. 155-180、査読無

②⑤ 林勲男、2009、「人類学からの災害研究」『すまいるん』89：7-14、査読無

②⑥ 林勲男、2009「災害エスノグラフィーとインタビュー」『自然災害科学』27(3)：236-241、査読無

②⑦ 栖谷友香・高島正典、2009「水害訴訟の回避に向けた地域リーダーの対応と役割」『土木計画学研究・講演集』40：CD-ROM、査読無

②⑧ 高桑史子、2008、「津波被災住民と仏教寺院：スリランカ南岸海村の事例から」『パース学仏教文化学』22：117-122、査読無

②⑨ 牧紀男、2008、「スマトラ沖地震からの復興：現地再建と居住地移転」『減災』3：21-29、査読無

③⑩ 栖谷友香、2008、「インド洋津波後のタイ南部における観光産業の復興過程とその課題」『神戸大学都市安全研究センター研究報告』12：185-196、査読無

③⑪ 齋藤千恵、2008、「死と破壊から始まる観光：アチェにおけるインド洋津波の解釈」『鈴鹿国際大学紀要』15：45-63、査読有

③⑫ 鈴木佑記、2008、「『漂海民』モーケンのライフヒストリー：スマトラ沖地震・津波被災後のアイデンティティ変容に関する考察」『平成17年度国際交流基金アジア次世代リーダーフェロシップ調査報告書』pp. 64-86、査読無

〔学会発表〕(計58件)

栖谷友香、2013、「東日本大震災後の地域・生活再建を支える「中核被災者」の役割と可能性」土木学会重点研究課題シンポジウム『東日本大震災を踏まえた防災計画研究の検討と今後の研究課題』(2013.3.29)土木学会講堂(東京都)

鈴木佑記、2013、「『日和見主義的』危機の克服：アンダマン海の漁撈民モーケンの生業空間をめぐる戦術」文化人類学会・課題研究懇談会研究会『危機の克服と地域コミュニティ』(2013.2.18)名古屋大学

Hayashi, Isao, 2012, "The Bereaved and the Folk Performing Arts in the East Japan Earthquake Disaster 2011" International Symposium 'Salvage and Salvation: Religion, Disaster Relief, and Reconstruction in Asia' (2012.11.23) シンガポール国立大学アジア研究所(シンガポール)

林勲男、2012、「災害の記憶を残す」国際シンポジウム『大規模災害とコミュニティの再生』(2012.11.17)国立民族学博物館(大阪府)

栖谷友香、2012、「東日本大震災後の地域・生活再建を支える「中核被災者」の役割と可能性：陸前高田市の自主防災組織による避難所運営を事例として」地域安全学会(2012.11.2)地震防災センター(静岡県)

田中聡、2012、「東日本大震災における緊急消防援助隊のエスノグラフィー調査」地域安全学会『東日本大震災連続ワークショップ2012 in いわき』(2012.8.3)いわきワシントンホテル椿山荘(福島県)

鈴木佑記、2012、「周縁における災害、アイデンティティの行方：2004年インド洋津波に被災した二つのモーケン集団に着目して」バンコク・タイ研究会50回記念ワークショップ(2012.2.26)京都大学東南アジア研究所バンコク連絡事務所

栖谷友香、2011、「応急仮設住宅における自治会運営の現状と課題 - 陸前高田市における半年間の参与観察を通じて」日本自然災害学会(2011.11.17)東京大学生産技術研究所(東京都)

Saito, Chie, 2011, "Women's Empowerment and Islam in Post-Tsunami Aceh" Association for Asian Studies and International Convention of Asian Studies (2011.3.31) Hawaii (アメリカ合衆国、ハワイ州)

鈴木佑記、2010、「二つの災害の齟齬：『漂海民』モーケンが経験したスマトラ沖地震・津波をめぐる出来事に注目して」第84回東南アジア学会(2010.12.5)東洋大学(東京都)

山田忠・栖谷友香、2010、「水害常習地域における住民の水害リスク受容と防災行動との関連分析」第29回日本自然災害学会学術講演会(2010.9.16)岐阜大学(岐阜県)

高桑史子、2010、「スリランカ漁民の生活空間としての海浜：漁業と観光」日本学術振興会 アジア・アフリカ学術基盤形成事業『アジア大都市周辺環境・防災問題解決に寄与する湿地・植生バイオシールド工学の展開』(2010.9.7)埼玉大学環境科学研究センター(埼玉県)

田中聡・牧紀男、2010、「スマトラ島西部地震の復興調査報告」日本建築学会2009年ジャワ島西部地震、スマトラ島西部地震被害調査・復興調査報告会(2010.4.19)建築会館(東京都)

Sugimoto, Yoshio, 2010, "Politicizing Miracles: Socio-religious Power Relations and Post-Tsunami Spread of Miracle Stories in Tamilnadu" 2010 AAG (Association of American Geographers) Annual Meeting (2010.4.17) Washington DC (アメリカ合衆国)

Saito, Chie, 2010, "Tsunami and Tourism

in Aceh: Islamic Interpretations of the Indian Ocean Tsunami” Association for Asian Studies (2010.3.27) Philadelphia Marriott Downtown (アメリカ合衆国、フィラデルフィア市)

高桑史子、2009、「内戦復興と津波災害復興のスリランカから：新たな社会組織・社会関係構築の可能性と人類学者の役割」南山大学人類学研究所60周年記念シンポジウム『21世紀アジア社会の人類学：回顧と展望』(2009.12.19)南山大学(愛知県)

林勲男、2009、「復興とレジリアンス：被災地支援を考える」関西学院大学復興制度研究所全体研究会(2009.12.5)関西学院大学大阪梅田キャンパス(大阪府)

柄谷友香、2008、「増大する水害リスクに向けた災害対応現場の実態と課題 平成18年7月豪雨(鹿児島県さつま町)に着目して」土木計画学研究・講演集(2008.11.1)和歌山大学工学部(和歌山県)

山本直彦、2008、「インド洋大津波後のインドネシアにおける住宅再建 その1 バンダアチエ市における現地再建による復興住宅の居住状態」日本建築学会大会学術講演会(2008.9.18)広島大学(広島県)

牧紀男、2008、「インド洋大津波後のインドネシアにおける住宅再建 その2 居住地移転を伴う再建」日本建築学会大会学術講演会(2008.9.18)広島大学(広島県)

②金谷美和、2008、「開発をめぐる接触の場としての染織品 インド西部地震後の更紗産地の移転過程」日本文化人類学会第42回研究大会(2008.5.31)京都大学(京都府)

〔図書〕(計9件)

①杉本良男・高桑史子・鈴木晋介(編著) 2013、『スリランカを知るための58章』明石書店、309頁。

林勲男(編著) 2010、『自然災害と復興支援』明石書店、420頁。

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.minpaku.ac.jp/research/activity/project/other/kaken/20251011>

<http://www.r.minpaku.ac.jp/isaki/disaster/>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

林 勲男 (HAYASHI ISAO)

国立民族学博物館・文化資源研究センター・准教授

研究者番号：80270495

### (2) 研究分担者

杉本 良男 (SUGIMOTO YOSHIO)

国立民族学博物館・民族社会研究部・教授

研究者番号：60148294

高桑 史子 (TAKAKUWA FUMIKO)

首都大学東京・人文科学研究科・教授

研究者番号：90289984

田中 聡 (TANAKA SATOSHI)

富士常葉大学・環境学研究科・教授

研究者番号：90273523

### (3) 連携研究者

牧 紀男 (MAKI NORIO)

京都大学防災研究所

巨大災害研究センター・准教授

研究者番号：40283642

柄谷 友香 (KARATANI YUKA)

名城大学・都市情報学部・准教授

研究者番号：80335223

山本 直彦 (YAMAMOTO NAOHICO)

奈良女子大学・生活環境学部・准教授

研究者番号：50368007

金谷 美和 (KANETANI MIWA)

国立民族学博物館・民族社会研究部・外来研究員

研究者番号：90423037

### (4) 研究協力者

齋藤 千恵 (SAITO CHIE)

鈴鹿国際大学・国際人間科学部・准教授

研究者番号：80387943

鈴木 佑記 (SUZUKI YUKI)

日本学術振興会・特別研究員 PD

研究者番号：60732782

〔最終〕